は數時間に亘りて討議せるが、最後に最高幹部及各部委員等七十八名に就てき投票を行ひし結果、七十三對五の大多數を以て「同盟罷業斷行」の事に決定せり。之に關し爭議團にて發表する所左の如し。

『今日迄一萬七千人の川崎造船所の勞働者は工場占領にあらざる眞摯な工場管理を希望し會社、勞働者、社會三者の安寧を欲したが工場管理を工場占領と解した官憲の壓迫は日に甚しく、工場に出で工場管理に移るとも到底官憲との衝突は免れ難く斯くては勞働階級の維持せる安寧は保證され難きを以て勞働者は此際罷工を決行し更に川崎造船所は切崩し運動の爲め職工各自に向つて印刷物を配布したが之が爲反つて勞働者は奮激を增し今日迄工場長、伍長等を通じて工場に交渉したことは總て水泡となり會社の誠意は全く認められぬので斷然罷工を宣言するに至つたのである』

尙賀川豐彦氏も此の決議に關して左の如く語る所ありたり

『工伍長を通じての交渉も勞働者の意を滿すには足りなかつた。川崎なり三菱なり神戸の勞働爭議は啻に神戸に於ける爭議でなく日本の勞働爭議である。資本家對勞働者が天下分け目の關ヶ原に戰ふの意氣を以て爭ふものである。此の爭議に勞働者が屈服すれば今後或る期間までに日本全國の勞働者が資本家に對して頭が上らぬ破目に陷る。單に川崎勞働者が川崎資本家に征服されたとのみで濟まぬ斯う云ふ淸い考へは殆ど全職工の腦裏深く刻まれて居るのであつた。愈よ川崎爭議本部では二十五日休業明けの態度として同盟罷工を決定したが今後に起る白熱戰こそ大阪藤永田造船以上の緊張したものと想像し得るのである』（七、二三、神戸又新）

一方罷業職工中の困窮者の救助方法の一として行商隊の組織を擴張すべく、行商隊聯合委員會を設け商品の仕入れ、行商區域擴張等に關し具體的協議を行ふ所ありたり。

翌二十三日川崎爭議團に於ては前夜最高幹部會決議の結果を齎して尙一應會社の誠意を促がすべく朝來交渉委員の選出に詮衡を重ねたり。其の結果各工作部及び兵庫、葺合兩工場より一名乃至二名の交渉委員を出す事となり、左の八氏之に選ばれたり。

▼造船工作部　尾崎熊吉、高橋八三郎
▼製罐工場　吉岡勘一
▼電氣工作部　山本賢吉
▼造機工作部　重富直太郎
▼兵庫工場　西岡琢太郎、三宅清治
▼葺合工場　玄間治郎吉

右委員を代表し尾崎、高橋の兩氏は會社重役に會見を申込み、午後二時會見すべしとの回答を得たるが、之より先き爭議本部に於ては早朝會下山に於ける出勤簿調印に結束を固め行商委員は約五百名の行商隊を指揮して市內を始め遠く大阪、明石方面へまで出張せしむる等持久戰の準備物々しきまでに緊張せり。

午後二時、前記尾崎氏以下八氏は傳令一名を從へ造船所本社第三應接室に於て會社側代表者永留、山本兩重役、國木田秘書及び各工作部長と會見す。辟頭尾崎委員は「交渉四回に及んで猶會社は滿足すべき解決を與へられず。斯くては徒らに爭議を延引せしめ會社も職工も共倒れとなり社會を騷がすのみなり。故に我々は玆に最後の交渉を爲すべく會見を申込みし次第なり。」との趣旨を述べたり。山本重役は之に對し「幾度交渉せらるゝも會社の態度は渝る事なし。社長歸國せば職工側に有利なる解決を與へらるべきも我々としては要求拒絕の外なし」と答ふ。例に依りて押問答を續くる事一時間